甲田の裾

KŌDANO SUSO

昭和五十五年八月発行



ハンセン氏病を正しく理解する集い式典（於青森市民会館）
藤楓協会総裁高松宮殿下のおことばを賜わる〈写真提供東奥日報社〉

5号

処暑お見舞申し上げます

昭和五十五年初秋

松丘保養園園長　荒川　巌　職員一同
親睦会会長　伊藤　文男　在園者一同
甲田の裾編集局

甲田の裾 第5号 目次

第51巻　通巻458号

写真……1
式順……3
講演　貞明皇后をしのびらい（ハンセン氏病）を正しく理解することについて　荒川巌……4
式辞……聖成稔……8
おことば……高松宮殿下……10
祝辞……野呂恭一……11
〃……北村正哉……12
〃……工藤正……13
体験談……戸井田吉之助……14

短歌　白樺短歌会……30
通信歌評　成田小五郎選……(12)……29
俳句　欣求俳壇　村上三良選……28
〃　みちのく集　佐藤静良選……28

川柳　むつみ集……小山冷月選……26
〃　明鏡集……鈴木可香選……25
園日誌……表3

身辺雑記……田原浩……23
岸柳樽日記……佐々木岸柳……22
随想　あの遠い日から(4)……菊池盈……18
随想　しゃぼん玉(46)……花田二徳……32



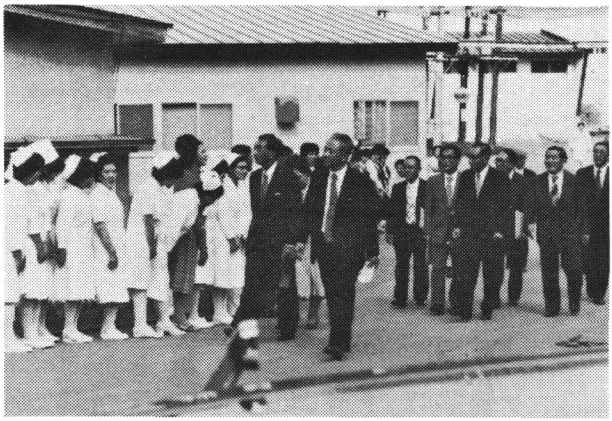
貞明皇后さまの御歌を合唱する明の星短期大学音楽科の皆さん



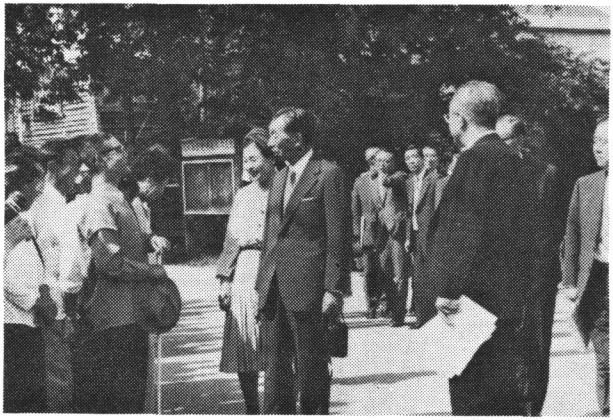
楓音楽クラブの実演



全国ハンセン氏病療養所から出品された作品展示会場（松木屋デパート）



高松宮同妃両殿下をお迎えする　職員



高松宮同妃両殿下をお迎えする　在園者



高松宮妃殿下特別重不自由者におことばをかけられる

貞明皇后をしのび、らい（ハンセン氏病）を正しく理解すを集い

と き　6月25日午前9時30分
ところ　青森市民会館

第一部

一、講　演　松丘保養園　園長　荒川巌
貞明皇后をしのび らい（ハンセンシ病）を正しく 理解することについて

第二部

一、開式のことば
一、式　辞　藤楓協会理事長　聖成稔
一、おことば　藤楓協会総裁　高松宮殿下
一、貞明皇后の御歌合唱　明の星短期大学音楽科
一、表彰ならびに感謝状授与
一、祝　辞　厚生大臣　野呂恭一
青森県知事　北村正哉
青森市長　工藤正
一、閉式のことば

第三部

一、体験談　松丘保養園　自治会執行委員　戸井田吉之助
一、演　奏　松丘保養園楓音楽クラブ
一、合　唱　明の星短期大学音楽科

司会奥村潮

主催　藤楓協会
後援　厚生省　青森県　青森市
財団法人　藤楓協会

一九八〇（S55）年六月二十五日　於青森市民会館

（第一部講演）

貞明皇后をしのび、らい（ハンセン氏病）を正しく理解することについて

松丘保養園
園長　荒川巌

1. 貞明皇后様のお心づかい（自分のことのように）

貞明皇后様は天皇陛下、故秩父宮様、今日ご臨席の高松宮様ならびに三笠宮様のお母様でございます。

貞明皇后様はご生涯を通じてつねにライを病む者をご自分のことのようにお心にとめておられたと承っております。

大正時代、皇后様であられた頃、沼津ご用邸に行啓の途中御殿場附近をご通過の際に、お供のかたに「このあたりにフランス人がライ患者の世話をしている病院があるそうだがどこか？」とお尋ねになって、大正十二年十二月に神山復生病院の患者六八名に、「癒ゆる日なき病に捕われ、運命のはかなきに悩む者たちに。」と、ご内帑金と共に、一人一人に一反ずつの反物を、裏地を添えて賜りました。

大正天皇が崩御せられ、多摩御陵にご参拝のおり、内務次官をお車近くに召されて、「ライを病む者は可哀想であるが、私の力では救うことはできないから、今後、かれらを慰めることに力を尽くしたい。あなたも役目であるから努力をしてもらいたい。」と、強く決意を促がされた、ということでございます。これが藤楓協会の前身ライ予防協会が世に生れる端緒になったお言葉でございました。

その後、大宮御所に於いては、お食事やお着物などご日常のご生活を切詰めてご内帑金を節約され、遂に、昭和五年十一月十日、当時で二四万八千円のお金を全国のライ事業に賜りました。これは世間に大きな感動を与え、わが国の救ライの道は、貞明皇后様のこのようなお心づかいによって支えられた、と申してよいでしょう。

この年十二月十日、北部保養院ではご仁慈を記念して

機関誌『甲田の裾』を創刊し今日に及んでおります。

このの ち年ごとに、大宮御所に全国の療養所長をお招きになっては病者についてお尋ねになり、その都度、ご内帑金や品々を賜りました。

昭和七年十一月十日、大宮御所の御歌会では題を特に「ライ患者を慰めて」と仰せいだされ、「つれづれの友となりても慰めよ　ゆくことかたきわれにかわりて」とお詠みになり、御歌を総理大臣、内務大臣、内務省関係者、各府道県知事、及び官公私立療養所長に賜りました。当時、長島愛生園に療養していた明石海人が、「そのかみの悲田　施薬の御后　今にますかに仰ぐかしこさ」と歌ったのはこの時でありました。

昭和八年に沼津に行啓の時のことを、当時の神山復生病院長岩下壮一の筆を借りてご紹介します。「里の子らは皆美しく着飾って、いそいそと奉迎に行くものを、あれほどのご恩恵をこうむりながら、私たちは世に忌まわしき伝染病者ゆえに、病院の所有地においてさえ奉迎が許されません。」この病者一同の心を院長は黙殺するに忍びず、四月二十七日、遂に意を決してご用邸に参上、日頃の御礼を申し上げ、病者一同の切なる願いとして、沼津より東京にお還りの時には是非、鉄道沿線の適当な場所でのお見送りのお許可を、とお願い申し上げました。

貞明皇后様は病者の願いをお聞き上げ下さり、東京にお還りの時、予め場所を定め、更に目印として一キロ前の地点に日の丸の旗を立てさせられました。

当日、お召列車がご通過の時、最敬礼を終って見上げる列車のお窓には、貞明皇后様には黒のご洋服で、畏れ多くもわれわれに向ってご起立になっていらっしゃいました。

昭和十年には北部保養院にも楓の苗一五〇本を賜りましたが、それが今は、病者の憩の森、楓公園になっております。

昭和十一年北部保養院が大火で全焼した時には早速翌日、貞明皇后様ならびに秩父宮様よりご救済金を賜り、その後もたびたび宮様方のご来園をいただきました。

昭和五十二年十月十四日には、皇太子殿下・同妃殿下のご来園を賜りました。

これらすべては、貞明皇后様のお心づかいと拝察申し上げます。

2. 光田健輔たちの努力

日本人で最初に顕微鏡下にライ菌、即ちハンセン氏菌を見た人は恐らく光田健輔でありましょう。

明治二十九年、東大医学部選科に籍を置いて間もない ある日、解剖用に送られてきた死体は、ふた目と見られないほど肉がくずれている上に異様な臭気を放っているライの死体でありました。助手や学生たちは、急に頭痛や吐き気を訴えて逃げ腰になり、山極教授も踌躇しました。「お願いします。手伝わして下さい」真剣に頼みこむ光田健輔の熱意に、教授は解剖を始めたがライの病理

は未開の分野でありました。光田健輔は前人未踏のこの分野こそ自分に与えられた研究課題であると、この時自覚したといいます。この屍体の股淋巴節の一片を顕微鏡下に見たその時から彼は生涯を懸けてライと取り組むことになります。

大学図書館でドイツ医学雑誌を読み、明治三十年にドイツが僅か二十人のライ患者発見に狼狽して第一回国際ライ会議を開き、ライの制圧に真剣に取り組んでいることを知り、「日本の現状はどうか！ライを病む貧しい者には何らの施策もなく、彼らは悲惨な生活のすえ、路頭に飢え死をする者が少くない。日本のライ患者に暖い手を差しのべているのは少数の外国人宗教家だけである。なんとかして日本人の手でこのライ患者の救済をやり遂げなくてはならない」、この想いが彼の胸中に渦巻き始めました。

「東京養育院とライ救済事業とは死ぬまで私の仕事だ」と言って手放さなかった明治の元勲の一人、渋沢栄一。維新以来、日本実業界の先覚としても、幾多の育英・慈善事業など社会的功労者としても、国家的元老であった九十一才の老翁、渋沢栄一は、「親、子、兄弟にさえ見捨てられているライ患者のため」とライ予防協会の初代の会長になりました。

この渋沢栄一を光田健輔らと共になって動かし、国の朝野に働きかけてライ対策を国家的事業にまで推し進めた人に、イギリス人の熊本回春病院長ハンナ・リデル女史らがあります。

又、北里柴三郎の弟子、北部保養院長中條資俊、彼は患者を愛しては慈父と慕われ、治ライ薬TRの研究にわれを忘れ、数々の逸話を残し、貞明皇后様のご慈愛に浴しつつ、救ライの生涯をこの青森の地に全うしました。

このほか、多くの理解者、共働者たちと共に、光田健輔はライ問題解決一本の道を進みました。日本のライ対策は光田健輔が少くとも中心の一人となり、現在の八分通り成功の域まで導いた、といっても過言ではないでしょう。

療養所の敷地に反対する住民の抵抗、国の施策の遅れによる定員過剰、食糧難、居住難、慰安作業と資金難、患者の不満爆発、様々な誤解、入所希望を断わられ故郷に戻ることもできず自殺に追いつめられた人。次々と行くてに立ちはだかる難題を創意と熱意によって解決しつつ、病者の生活と医療の場であるライ療養所を創造してきたつわものたちの努力は尋常のものではありませんでした。

3. 差別と人柱

全き愛の不在が、人格を無視し、差別を生み、偏見を育てます。冷淡な社会、消極的な政治、貧しい医療と施設、これらはライ予防法の差別と偏見の姿であります。

大東亜戦争の最中の強制収容には目に余るものがありました。

隔離時代の病者の屈辱と苦痛、犠牲と忍従については患者が綴る多磨全生園の七十年『倶会一処』とか、松丘保養園七十周年記念誌『秘境を開く』などをご覧いただきたいと思います。

病者は、社会をライより守るために、家庭より引き割かれて、隔離療養所といういわば戦地に送られた兵士であり、又その戦地を暖い相互扶助の療養所に育てた人柱でもありました。

4. 医療を育て得る新秩序

（新しい歩み）

現在、厚生省は正しい知識として、

①ライ即ちハンセン氏病は伝染力の弱い慢性疾患で、一般的に感染乃至発病の可能性が少ないこと、②ハンセン氏病も他の伝染病と同様に治療効果が得られ、特に早期治療が肝要であること、を強調しております。

隔離収容という犠牲を強いる非常手段以外に病気根絶の道のない時代は終りました。有力な治ライ剤が与えられ患者の大部分はハンセン氏菌陰性になり、社会の新発生患者数は、年毎に減少して参りました。

但し、早期治療とフォローアップとは忽せにはできません。今は、患者のために積極的に医療を推し進めることが予防成功の道でもあります。

現在のライ療養所は、ハンセン氏病の医療と共に身体的・社会的後遺症及び成人病・老人病の医療にも取組んでおりますが、ライ予防法に立つライ療養所の故に、その制約によって近代医療と社会性を導入することに、困難を覚えております。

私共は、一日も早く今の古くなった隔離主義の予防法が取り除かれて、医療を育てることの出来る新しい秩序が与えられることを望んでおります。私共は健全な医療の活路を得て、ライ即ちハンセン氏病とその後遺症との医療を更に推進する、と同時に、慢性の機能障害者や老人のための暖い医療の道を育てて参りたく思っております。

ライ療養所は、今や、隔離差別され孤立した世界から世間の皆様の新しい療養所に生れ更らなければならない時に立ち至っていると思っております。

後遺症がありましても伝染の虞のない場合は、普通の市民として進んで皆様のお仲間に入れていただき、今の療養所の医療の足りないところは、時の来るまで、一般の皆様方の病院のお世話になりたくお願い申し上げます。

日本の社会は加速度的に国際化し、世界各地との交流は日ましに盛んになる一方でありますが、今もなお、世界の総人口の約〇、二五%はハンセン氏病患者であります。一般の皆様も、病者も、医療従事者も、互いに手をとり合い、隣国の、更に世界各地の病める友のためにも心を遣い、共に苦しみ、共に喜び合う時代になって参りました。ライを理解することは、それ以上に全き愛を学ぶことであります。世間の皆様の正しいご理解から出る暖いお心遣いを、お願いして、私の講演を終わります。

式辞

藤楓協会理事長　聖成稔

本日ここに総裁高松宮殿下並びに同妃殿下の御臨席を仰ぎ、貞明皇后をしのび、ハンセン氏病を理解する集いが、全国十六カ所のうち最北の松丘保養園の所在するここ青森県に於いて、かくも盛大に開催出来ますことは誠に感慨深いものがございます。

六月二十五日は、御生前ハンセン氏病者の人々の為に御心を注がれ、数々の御仁慈を賜わりました、貞明皇后様の御誕生日に当たる日でありまして、藤楓協会におきましては、毎年この日、各地でこの集いを催して、広く皆様方のハンセン氏病について、ご理解と御協力をお願いして参りました。

曽って、この病気は遺伝病とか、不治の病いとか云われ、この偏見、誤解のため、本人はもとよりその家族の方々まで大変迷惑をかけ、苦しんでこられました。

しかし、今からおよそ一〇〇年前にノルウェーの医師ハンセン氏によって病源菌が発見され、遺伝病ではなく、弱い伝染性の病気であることが明らかになりました。

又、近年に至って、この病源菌に強い効果的にはたらく特効薬が発見されて、治る病気となりました。

そして、回復者は年を追って多くなり、療養所の門を出で社会に復帰された方々も大勢おられるようになりました。しかし、療養所におられる人々の平均年齢は六十才に近く、従って高齢のため、或いは失明、その他後遺症が強いため、ハンセン氏病が治っても止むなく社会復



療養者展示作品をご見学の高松宮同妃両殿下
〈写真提供東奥日報社〉

帰を断念して療養所生活を続けざるを得ない方々が沢山おられることを忘れてはなりません。

皇室におかれましては、天皇・皇后両陛下をはじめといたしまして、皇太子同妃両殿下、総裁高松宮殿下同妃殿下並びに各皇族方におかれましても、貞明皇后様の御遺志にそうて、各療養所をご慰問、或いはご激励をあそばされ、ハンセン氏病を正しく理解する運動に卒先、ご垂範を賜わっておりますことは感激の至りでございます。

近年、我が国に発生する新しい患者は年々減少の一途をたどり、昨年は全国で僅かに四十四名となりましたが本土十六名に対し、沖縄県は二十八名で、沖縄は本土に比して多くなっている状態でございます。

当協会は事業の推進に一層の努力をして、今後共強く各方面のご協力をいただいて、ハンセン氏病を正しく理解する運動を広め、一日も早く我が国のハンセン氏病問題の解決を期したいと存じます。

本日、この式場に於いて、事業の功労者として表彰申し上げます方々は、永年に亘ってハンセン氏病に対する深いご理解とご尽力をつくされた方々でありまして、その御功績に対し心から敬意を表する次第であります。

終わりにこの集いの開催に一方ならぬご尽力をいただきまた、厚生省、青森県、並びに青森市、そして、常々ご理解ある御援助を下さっております常盤会外ご関係の皆様方に厚く御礼申し上げて式辞と致します。

昭和五十五年六月二十五日

おことば

藤楓協会総裁　高松宮殿下

ご当地の方々に日頃ご親切な協力をしていただいております、国立療養所松丘保養園の所在地であります、この青森市に於きまして、初めて「ハンセン氏病を正しく理解する集い」が、開催されまして大勢の参会を得てこの運動を進めようという事の出来ますのは誠に意義のある事と存ずる次第でございます。

最近は、我が国におきまして、新しい患者の発生が、年々著しく減少しております。又、特効薬の開発と医療にたずさわる人々のたゆみない努力によりまして、このハンセン氏病は治る病いとなり、社会復帰して立派に活動しておる人々が沢山ある事をご存じの方もあるでございましょうが、誠に喜ばしい限りと存じます。

しかしながら、この病気が治りましても失明とか、その他の後遺症のために社会復帰が出来ず、止むなく療養生活を続けざるを得ない人々が、まだ大勢おるのでありまして、療養所の生活が明るく、幸せであるようにという関係者の方々の懸命なご努力に対しては、誠に感謝に堪えないのであります。又、園内の療養者は年々老齢化しておりまして、不自由な生活と、孤独の淋しさは増すばかりであると考えます。この人達は、いわば、我が国のハンセン氏病を根絶するための活動の大きな功労者に匹敵する人々であるのでありまして、皆さん方のますますのご理解を願う次第でございます。それでありますのに、我が国には今尚、社会にこの病気に対して根強い偏見、誤解があり、そしてそれは本人はもとより家族の人々にまで、精神的その他の苦痛を与えていることを私は毎年訴えているのでありますが、いまだにこれが正しくなっておらないことを残念に思うのでございます。

本日のこの集いを契機といたしまして、ハンセン氏病を正しく理解する運動が進展し、誤解や偏見がなくなりハンセン氏病の人々、その身内の家族の方々に対する理解のある温かい手を今後共に差し伸べられますよう、そして世界のハンセン氏病の患者の幸せと、この病気の根絶ということにつながる進歩があるようにお願いいたして、私の挨拶にする次第でございます。

祝辞

厚生大臣　野呂　恭一

本日ここに高松宮同妃両殿下のご臨席のもとに、財団法人藤楓協会主催の貞明皇后をしのび、ハンセン氏病を正しく理解する集いが開催されるに当たり、一言祝いの言葉を申し上げます。

ご承知の通り、我が国のハンセン氏病対策は皇室の深いご理解と永年に亘る関係各位のたゆまぬご努力により着実にその成果を上げてまいりました。医学の進歩と治療薬の開発によって不治の病いといわれたハンセン氏病が治癒する病気となりました。

患者の数は、昭和初期の約一万五千人が、現在では一万人を下回るように減少しており、一方福祉の面におきましても、年々向上している事は誠に喜ばしい事と存じます。

政府といたしましても、最近の目指ましい医学の進歩に相応した医療及び福祉の充実をはかると共に、この病気を一日も早く根絶するために今後共一層の努力をいたす所存であります。

今大会は、全国の第一線において、ハンセン氏病関係事業の推進にたずさわっておられる方々をはじめ、関係の皆様が一堂に会され、ハンセン氏病に対する正しい知識の一層の普及をはかろうとされるものであり、その意味は誠に大きいものと考えます。

本日は又、多年に亘りハンセン氏病関係事業に貢献されました方々に対しまして、会長から感謝状を贈呈され、その功労に対して報われましたことはこの大会を一層意義あらしめるものであり、これらの方々の日頃のご功績に対して衷心から感謝の意を表するものであります。

最後に、この大会を契機といたしまして、本日お集りの各位はもとより一般の多くの方々が、ハンセン氏病について正しい理解を一層深められますことを期待して祝辞といたします。

昭和五十五年六月二十五日　（代読）

祝辞

青森県知事　北村正哉

本日ここに高松宮殿下並びに同妃殿下のご臨席をいただき、財団法人藤楓協会主催の「貞明皇后をしのび、ハンセン氏病を正しく理解する集い」が開催されるにあたり一言お祝いのことばを申しあげます。

この「集い」は、御生前ハンセン氏病対策事業に深くみ心を寄せられておりました貞明皇后さまの御遺徳をしのんで毎年御誕生日にあたります六月二十五日に開催されておるのでございますが、このたびは創立以来七十年を迎えた、国立療養所松丘保養園がございます当青森県において、初めてこの「集い」が開催されますことは誠に喜びに堪えない次第でございます。

さて、ハンセン氏病は、昔は親子代々遺伝する病気であり、一生治らない病気として大変恐れられてきました。

しかし、一八七三年にハンセン氏病の病源菌が発見され、遺伝するという誤った考えは打ち消されてまいりました。

更には近代医学の著しい進歩と、特効薬の開発によって、もはや不治ではなく、完全に治ゆするようになり、事実社会復帰をして活躍されている方々も大勢おられます。

しかし、社会復帰をし、一般社会人としてすごしたいという強い希望をもちながらも、なお、療養所にとどまっている方々も大勢おられます。

それは、ハンセン氏病に対する無理解、偏見がまだまだ一般社会に根強く残っているところにも原因があると感じております。

私どもといたしましても、ハンセン氏病を正しく理解するための啓発活動をより積極的に推進し、社会の無理解、偏見の是正に努めるとともに、入園者並びに家族の福祉の増進を図ってまいりたいと思っております。

この催しを新たな出発点として、ハンセン氏病を正しく理解する運動の輪をよりひろく、より大きくしていくために、皆様方の一層の御理解と暖かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

本日、ハンセン氏病事業の功労者として表彰をお受けになられました方々に対しましては、そのご功績に対し心から敬意を表するとともに、藤楓協会はじめ療養所、全国都道府県のハンセン氏病関係事業の推進に尽力されている皆様の今後のより一層の御活躍を切望いたしまして、お祝いのことばといたします

昭和五十五年六月二十五日

祝辞

青森市長　工藤正

高松宮殿下・高松宮妃殿下の御臨場を賜わり、全国各地から多数の関係者をお迎えし、ここに「貞明皇后をしのび、らいを正しく理解する集い」が、青森市において開催されますことは、この上ない光栄であり、限りない喜びであります。二十八万六千市民とともに心からお祝いを申し上げます。

承わりますと「らいを正しく理解する週間」は、六月二十五日を含む一週間にわたり実施され、この六月二十五日は貞明皇后のお誕生にあたりますが、貞明皇后は、らいの予防と患者の救護にいたく心を寄せられた方であったことから、この日を「救らいの日」とし、その御遺徳を偲ぶとともに、らいに対する正しい知識の普及と、らいに対する旧来の偏見の是正に努めるために開催されているように聞き及んでおります。

本日の集いを主催されました藤楓協会におかれましては、長年にわたり、らいに対する正しい知識の普及に尽力されながら、療養者に対する援助及び予防並びに治療の調査研究など幅広い活動を続けられており、日頃の御努力に対し衷心より深く敬意を表する次第であります。

申し上げるまでもなくらいにつきましては古くから長い間続いた偏見が根強く残っておると同時に、その病状が正しく理解されていないことから、病いを患われた方々だけでなく家族の方々までが、社会から冷遇されて参りましたことは誠に残念なことであり御同情に堪えないところであります。

幸いにして近年関係者各位の深い理解と、長年にわたる正しい知識の普及の努力によりまして、らいに対する認識が正しく理解されつつありますことは誠に喜ばしい限りであります。

先程長年にわたって、らいに深い御理解をもって正しい知識の普及に多大の御尽力をされた功労者に対して表彰が行なわれましたが、受章されました方々には心からお祝いを申し上げますと共に敬意を表する次第であります。

どうか、本日御参集の皆様方には、この集いを契機といたしまして、さらにらいに対する正しい理解が広く国民の中に普及されますようなお一層の御尽力を賜わりますとともに、罹病されております方々の一日も早い御回復を心からお祈り申し上げる次第であります。

終りにあたり、この集いのますますの御隆盛と、本日御参集の関係者各位のいよいよの御多幸を心から祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

昭和五十五年六月二十五日

本日、皆様の前で貴重な体験談を申し上げる予定になつておりました、私共の大先輩であります戸井田吉之助さんが、五月二十七日突然病いに倒れ、病床にあつて手厚い看護を受けていたのでありますが、去る六月十四日遂に不帰の人となつてしまいました。

従いまして、本日は戸井田さんが病いに倒れる寸前まで書かれておりました原稿を、不肖私が代りに発表いたしますことをお許し願いたいと思います。

（副会長　藤崎陸安）

体験談

松丘保養園
自治会執行委員　戸井田吉之助

本日ここに高松宮殿下を始め来賓各位の御臨席を仰ぎふつつかながら体験の一端を申し上げることの出来ますことは誠に感激に耐えない次第であります。

まず、私は、松丘保養園に入園するにいたりました動機について申し述べて見たいと思います。

私の郷里は秋田の田舎でありますが、当時盛岡市の一角に騎兵連隊がありまして、そこから除隊したのは昭和七年の十月でありました。

そして、その翌年の二月、ある日私が屋根の雪おろしをやっているところへ、兄が来て次のように云ったのであります。

「この間叔母が来て云うには『兵隊から帰ってからのお前の顔はどうもただごとではないようだ。近所でも変なうわさをしているようだから一度病院へ行って診て貰うように』」と、簡単ではありましたが、これだけのことを云うまでには大変な勇気を要したことでありましょう。

私は、これは母親が親として云うに忍びないので叔母にかこつけて、兄に云わしめたのか、それとも兄が見るに見かねて自分から云い出したのか、その辺のことは、さだかではありませんでしたが、私はとうとう来るものが来たという感じで素直にこの言葉を受け止めたのであります。と申しますのは、私自身、顔のむくみや、手足のしびれなどひょっとしたらと云う予感があったのでありますが、ここのところ、呑み過ぎたせいだろうと、自分なりに理屈をつけて、平静を装ってはいたものの、このように面と向って云われて見ますと、丁度、証拠をつきつけられた犯人のように恐れ入りましたと、観念せざるを得なかったのであります。

そして、その翌日、早速父に連れられて秋田市の県立

病院を訪れ、診察を受けたのであります。

父が医師から聞いたところによりますと、疑しいと云うことでありましたので、更に赤十字病院へ行って診察を受けましたが、ここでは「はっきりしたことは、仙台の大学病院へ血液を送って調べて貰わなければわからない。それには、一カ月位かかるが、その際、仮に病気だとわかった場合でも、この病院では治療のしようがない」と、まるで頼りにならないお話でありました。だが、この時こちらから別に伺った訳でもないのに青森に専門の療養所があると云うことを、ことこまかに教えてくれたのであります。

そこで私は、たとえ県病や赤十字病院の医師であっても、こと本病に関しては、云わば素人であってその医師が疑しいと云うことであれば既に病気にかかっているに違いない。このように考えまして、その足で警察署を訪れ、松丘保養園へ入園すべく手続きをとったのであります。

それは、当時北部保養院といって北海道、東北六県からなる公立の療養所でありましたので、たとえば私の場合、秋田県出身の入園者に欠員が生じなければ入園は出来なかったので、そのために警察署を通じて申込んでおく必要があった訳であります。

尚、私がこのようにあわただしく入園の手続きをとった背景には軍隊から帰ったばかりで、仕事はこれからと云う矢先でもありましたし、ともかく一日も早く病気を治さなければならない。それには専門の療養所で治療を受けるより他ないと信じたからであります。

ですから私は、警察署からの連絡が待ち遠しくて早く入園できるように催促の手紙を三回も出したほどであります。

このように気をもみながら家の中に閉じこもっていたのでありますが、こうしている間にも、どこからどう聞こえたものか、北海道は、登別温泉の湯の花を売りに来るもの、また草津の一療養者からは聖書が送られて来たり、或いはどこそこの祈祷師にかかって見たら?などといろいろと心配してくれる向きもありまして、大変ありがたいことではありましたけれども、その反面医師でさえはっきり病気だと云ってもいないのに、あたかも、それと決めつけている世間の目のこわさから早く逃れたい思いでいっぱいでありました。

さて、ようやく警察署から通知がありまして、まだ夜が明けやらぬうちに逃げるようにして、村を出たのは昭和八年五月一日、いわゆる父と二人だけの特別列車で青森へ向ったのであります。

この間約五時間、別に話しをすることもなく、重苦しい空気の中で私は、夕べこのひたいに顔を押しあてながら、一晩中、泣き明かした母のことや、これから始まるであろう療養生活のことなど、あれやこれやと思いをめぐらしたり、また専門の先生が診たら或いは「病気ではない」と云われるかも知れない。そうなったら大手を振つ

て家へ帰ることができるのだ、こんな祈りにも似たようなことを考えたりしたのであります。

こうしていよいよ保養園に着きまして、案内されたのは、入園者代表の他に四、五名同居しておられる事務所兼用の大きな部屋でありました。

正直なところ私は、これは大変な所へ来てしまった。父に黙って帰ってしまおうかとさえ思ったのであります。それは自分が頭に描いていた療養所と実際この目で見た療養所ではあまりにも違うものがあったからであります。

父は私のこうした気持を察したかのように部屋の方々から何か伺っていたようでしたが、「この病気は必ず治るということだから一生懸命治療して早く帰つて来るように」となだめすかすようにしていくばくかの金を握らせて帰って行きました。

私は間もなく比較的軽症者のいる部屋に入れられたのでありますが、しばらくの間は食事もノドを通りませんでしたので、軍隊で貰った何枚かの賞状を部屋の壁に貼りつけ、滅入りがちな自分をはげましながら、治療に取り組んだのであります。

そうした或日、私は予備役召集の通知を受けましたが時の園長は当然のように園から出ることを許してはくれなかったのであります。

本当のところ私は、この一点に期待をかけ、このことのために出来得る限り、早く入園したのでありますが、このように召集への許可を得られないばかりか、おまけに兵役免除という思いもよらぬことによって完全に社会的地位を失ったのであります。同時に私は短期間のうちに治るものと信じていた、この病気はおそらく生涯かけても治らないであろうと云うことを思い知らされたのであります。

従いまして、病気に対する治療もどうせ治らないのであれば、せめてこれ以上悪くならないようにと目標を変えなければならなかったのであります。

ここで泣いても、泣き切れぬものなら、笑うよりほかないのではないか、私は心機一転この地を第二の故郷と定め自らの骨を埋めるにふさわしい、いわゆる楽園造りに今後をかけようと決意したのであります。

あれから正に四十七年、この間、火災、戦争、敗戦、予防法改正など、幾多の特筆に値する歴史的事件を経験し、かっては暗黒と目されていた療養所が、今日のような明るい姿となったのでありますが、これは一に御皇室の、特に貞明皇后さまの数々の御仁慈に支えられながら職員、入園者それぞれの努力によるものであることは申すまでもないところであります。

御承知のように、新薬「プロミン」の出現によって治らないとされた病気が治る病気となったことはこれにまさる喜びはありません。けれども、ここ数年来、成人病ことにガンによる死亡者が目立っていることから、私をも含めて入園者は今大きな不安にかられている実情であります。このことは、医療機械、器具の不備と相まつて

医師の不足によるものでありますことは疑いのないところでありまして、この問題の解決こそ、今後に課せられた重要事であろうと思うのであります。

それにいたしましても、私は後になって考えてみたのでありますが、当初、県病、赤十字と県内でも一流の病院で診察を受けたのに、いずれも疑しいと云われたあの言葉の裏には、はっきり病気だということが判っていたのではなかろうかと云う事であります。

もつとも、法律では診断に当たった医師は、患者及び家人に消毒その他予防方法を指示し、三日以内に行政官庁に届出ることが義務づけられていましたので、こうしたわずらわしさを避けるために、本当のことを云ってくれなかったように思うのであります。

そのことは、青森に専門の療養所があるから、そこへ行った方がいいと云わんばかりのお話しであったことからも、うなづけるのであります。しかし、私はそのこと事態、とやかく云うのではなくて、只今申し上げたことが若しも本当だとすれば、私が「すでに病気にかかっているに違いない」と、判断したことに誤りがなかったということを申し上げたかつた訳であります。

そして私は、結果論かも知れませんが、兄から云われた「一度病院へ行って診てもらうように」と、云うあの一言が引き金となってなんのためらいもなく保養園の門をくぐったのでありますが、そのことによって病気の悪化を食い止め今日まで、ながらえることができたものと信じておりますし、不幸中の幸いとはこのことかと、自分自身に言い聞かせていますことを申し上げまして、つたないお話しを終わります。

以上が、戸井田さんのお書きになりました原稿でありますが、ここで御来場の皆様方にお知らせと御礼を申し上げます。

と、申しますのは、この病気に対する永年に亘ってのいまわしい過去の因習から偏見除去の厚い壁として、私共が関係方面に改善をお願いして参りました「ライ」という呼称の変更について、先き程からお気付きのことと思いますが、今回のこの集いから「ハンセン氏病」に改めていただく事ができました。また、厚生省も「法律に触れない程度で『ハンセン氏病』の病名を使用するよう指導したい」との方針を示して下さいました。私共のために深い御理解と暖い御配慮を賜りました高松宮殿下をはじめ、厚生省、藤楓協会並びに関係者の皆様方に、高い壇上から大変失礼とは存じますが、心から厚く御礼を申し上げさせていただきます。本当にありがとうございました。

随想

あの遠い日から

故郷その頃（四）

関口先生のこと

菊池盈

私はただの一度も教えを受けたことのない、この関口という老教師に心がひかれるのは物心がついて、始めて瞼の裏に止った肉親や或いは村人とは何故か違うという印象が、強く残っているからでもある。それだけに一年生として分校へ入学するまでの何カ月か、数週間だったか、それ迄は記憶もさだかではないがよく覚えている。

分校の教室は先生が寝泊りをする座敷とが背中合せになった小さな建物であり、東に面し教室へ入る濡れ縁の様な板敷へ上って右の戸を開ければ座敷であり、左を開ければ教室で教壇がすぐにある。

座敷は寝室と居間とに別れており、居間には以前松丘の共同部屋で使用したと同じ四角な炉があった。居間の北側に一坪はあるかないかの本屋からはみ出た小さな土間があり入口になっている。其処は又浴場にもなって居り、木で拵えた水風呂が置かれて在る。そして向かい合うように、薪を燃やして御飯を炊く、この地方独特のくどといわれるかまどがある。近くを流れる小川から水を汲む不便さはあったが、結構自炊出来る状態にはなっていた。

しかし、関口先生は年を通して分校に泊ることはなかった。自宅が十粁以上離れている遠隔の地から赴任していたので、到底現代のように車のある時代とは違い、毎日通うことなど出来る状態にはなかったが、週末には時折り郷里へ帰って行く。そして月曜の朝始業時間に間に合うようきちんと戻って来る。

部落の東外れに建つ神社の森を過ぎると分校が一番先に視野に映る。月曜の朝この神社の森を過ぎて道端の木立の間から見え隠れに、悠然と歩いて来る関口先生の雄姿は一幅の絵でもあった。夏は黒い絣の入った白い着物に黒みがかった袴を穿き、白足袋に黒い緒の高下駄、それにカンカン帽といった出立ちであり、冬は縞の着物に細縞の袴、羽織を纏った上に黒いマントを着、中折れ帽子を被り、黒足袋に爪皮のかかった高下駄を履き、ステッキは護身の為か、それとも老境に入った為か常に手から離すことはなかった。

関口先生には何んとなく威厳があるように思えた。今まで怖い人知らずに騒ぎまくっていた生徒達も、一度先生の姿を見ると急に緊張が高まりシュンとなってしまう。私はそうした光景を何度か覚えている。入学もしていな

い幼稚な時代だったが、余所に遊び相手も居ない末っ子のせいもあり、分校へ通う兄姉にくっついて毎日のように分校の校庭を遊び場としていた為でもあろう。

確かに関口先生は生徒には怖く厳しい先生でもあった。先生から教えを受けた今は亡き兄の話を憶い出すのだがスポーツだけが得意だった兄は、他の科目は丸っきし駄目で、勉強することは尤も苦手としていたが、喧嘩は誰よりも好きだったようで、よく仲間をいじめては泣かせ相手の両親から先生に叱言が持ち込まれ、兄はその度に一時間の罰を受けて、教室の隅に立たされたか知れない、と、後年になって自慢気に誰彼となく語り聞かせたのを覚えて居り、今私の記憶にも厳しい眼差しの先生の顔がありありと浮かんでくる。

先生は生徒に対してはいつも厳正であったともいう。田舎の学校にありがちな、村長の息子だから、有力者の子供だからといって、点数を甘くするといったたいこ贔負は絶対になかったともいわれている。この関口先生が分校に在職中、当時の私の家は裕福であり、父が農業をやっているとは云え、明治中期の高等教育を受けているという経歴もあることから、部落は勿論村内でも一応名士としてまつり上げられていた。そんな訳で先生と父とは極めて親しい間柄でもあり、交流は頻繁に行なわれていた。金に困る時代でもなかったので、父はよく分校へ物品等の寄贈をした。細かい物では五徳や火箸に至るまで不便を来しているものは本校や村役場にお構えなく勝手に援助をした。勿論当時としてもどんな些細なものであっても、公共の為の援助であり一々本校へ報告されるものであり、父の行為は校長からも高く評価され、学校への特別なる協力者というか、好意を持たれても居たようで、全ての学校行事には来賓として特別の招待を受け、それは家が没落し無一文となって他界するまで続いた。十一年の暮れ亡くなった父の葬式の日、時の校長である須釜一覚という右頬に馬の蹄の傷痕のある先生が、弔詞をもって参列、父の功績を讃えて呉れたことを、面映ゆい気持で聞いた事を記憶の片隅に嘘のように残っている。

そうした父との深い関係を持つ関口先生ではあったが父の子供、いわゆる私の兄姉に対してさえ是々非々であって、暴力、嘘つき、盗み、といった常識を逸脱した行為に対しては絶対に容赦をせず、鞭を喰らわせ、罰を与えたといわれている。

元々先生は明治の人であり、明治の気質が脈打ち律気で潔癖で清廉な方であったのかも知れない。教育のし方も国定教科書に基づいて教えはしたが、唱歌と体操は一切教えたことがなく、従って方法も寺小屋式で、読み書きそろ盤といった方に重点が置かれた風である。点数は甲乙丙で決め、何れも上中下をつけ、赤のクレヨンを用いた。草書で一筆に甲の上とか乙の下とか、半紙の左側に認める字は、特調があり今でも瞼の裏に残る。部落の生徒で先生から甲の上を貰える者は滅多になく、普通は乙の上位が良い方で、甲の下すら容易ではなかったとい

われている。それだけに採点は厳しかったが、書の場合先生から無条件で甲の上を頂いた生徒が、各地で催される展覧会へ出品した場合確実といってよい位、入賞出来たというから、辺鄙な田舎の分校の先生としておくには惜しい相当の大家でもあったのだろう。

又、先生は絵の大家でもあった。私は父から関口先生は絵書き（画家の意）なのだ、とも聞かされていた。先生の絵は主に墨画であり襖絵を得意とし、それも鷲の絵がおはこでもあるようだった。

当時、私の方の家の構造は一律で、奥まった部屋の仕切りが、帯戸といわれる真中をいかにも帯をメたような栗色に塗った板戸の仕切りと、襖の仕切りとの二通りであった。その襖も現代のように多彩な模様を画いた専用の紙などなかったようで、表具師が貼り替える紙は純白の紙と決っていた。それでは何んの変哲もない無味乾燥なので、好みに依って文字とか絵を画かせたものである。文字は字書きという専門家なのであろう羽織袴を纏っていかめしい髭の生えた先生を態々町から呼び寄せて、宿泊をさせ、数日がかりで書かせるのである。絵は殆んど関口先生が放科後懇願された家へ出向いて画いた。

広い座敷の中で、白鉢巻に白襷といった剣道の指南番みたいな出立ちで黙々と、白い襖を睨め乍ら筆を走らせている先生を、私は恐しい人のような印象で覚えている。叱られたからでもあろうか、先生は何にも妨げられない静寂な個室に於いて、自ら頭の中に画いている着想を、雄大に着実に表現しようとしているものであって、そこには名人然たるプライドがあったのかも知れなく、絶対に他人を寄せつけないといった雰囲気の中でしか仕事をしない性質のようで、何も知らずに興味半分で覗き見などする子供達など、当然一喝で追い払われてしまうのは必定だった。

私は小学校に入ってから何年か後、そうした先生の画いた襖絵をたった一度だけ見たことがあった。親戚ではない家ということと、その家に遊び友達もないということで、その家へは入ることもなかったが、丁度その家が部落の世話役であった年、夏の暑い盛りに催される、百万遍の行事のとき、数珠を廻しに子供同志揃って行った時にはからずも先生の画いた襖の鷲の絵を「すごいなアすごいなア」と、口ずさみ乍ら驚嘆の眼で見たものである。私にはその時がたった一回先生の絵にお目にかかった機会でありチャンスでもあった。

あれから五十年、部落は人影さえ見られぬ程に過疎化し、昔ながらの萱葺きの家々が、近代化してゆく余所の部落とは無縁のように緑だけ濃い山間の一隅で、今にも埋没しそうな侘しい名残りを止めていた。

既に部落で炭を焼き、馬車を曳いて生計を立てるといった、そうした姿を眼にすることは出来ないが、昔からの宿場として、其処に生れ其処に住みついて来た一連の流れだけは止ることがなかったものの火災に遭って場所を変えたという一二軒を除いては、同じ場所に同じ姿で

昔のなつかしい思い出の家が並んでいた。

関口先生が画いた襖を、今でも使用している家が、或いはあるかも知れないと私はつい思ったりする。二三軒は画いて頂いた筈である。残されていても農家のために真黒く煤けているか、子供の悪戯らで破られ貼り替えられているのかも知れない。私の記憶にある「源四郎」の家は、隣家からの貰い火で火災に遭い、元の場所に家はなく、関口先生が最後の筆となった襖も或いは灰燼に期したか私には知る由もない。

去る五十一年の夏、全く予告もなく遇然に高校三年になった従兄弟の孫が学生最後の旅行だ、と云ってバイクによる北海道の旅を終え、友達と二人私を尋ねて来た。どちらも会ったこともない一面識である。連れの友達の故郷を訊いたところ、奇遇というか関口先生と全く同じ部落であった。

以前から私は、この関口という老教師に些かの興味を覚えていたので、長坂というその部落がどんな部落であるのかなど知りたいと思っていたし、思いも掛けない珍客に喜びを大きく私はくどいようだったが細かく訊ねることが出来た。

五十年も昔のことであり、高校生位では古いことなど知る筈もない。現に部落には「関口」という名字さえ消えてなく過去となった関口先生のことなど話にも聞いたことがないという。私は内心がっかりもしたが、それだけに時代の流れが激しく、人間はおろか地上をもむしり替えたのだということを思わずにはいられない気がしてならなかった。

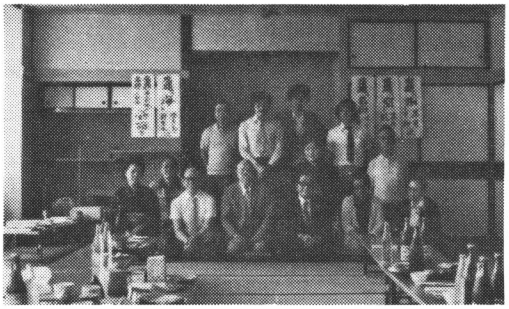
その古き時代、部落の人々より畏敬され、信望を集め教育者としての威厳を失わず、大風が吹けば寝転びそうな小っぽけな山村の分校に甘んじ、不平も言わず一生を捧げたと思われる偉大な関口先生ではなかったかと想われるのだが、生れ故郷にさえその幻を止めていなく、あっという間に過ぎ去ったと思う五十年という歳月が、こんなにも遠い昔であるのかと、しみじみ考えさせられるのである。

既に真名子部落には分校はない。四十七、八年頃だったと思うが、生徒の減少に依り分校維持が難しく、春を待たず秋口に七十余年の使命を終え廃校になったものである。校舎跡地は雑草が繁るにまかせ荒涼として、昔を偲ぶ私には感慨胸を突き抜く佗しさを禁じ得ないものがあった。

上野から東北線の列車に乗り、栃木県境を越えると白河郷に入る。街並を右に見、駅へ着く手前左手の阿武隈川を挟む、小高い山の頂きに、一目で分る大きな看板「酒は大七」と白い文字が見える。その看板の左斜め下の山懐に群れる村落、その村落が長坂であり関口先生の故郷である。

岸柳樽日記

佐々木岸柳



おかじょうき川柳社と北柳吟社の交歓句会

六月二十一日（土）晴

どの朝刊も明日の同時選挙を占う記事で、一面を飾っている。――明日の日本を決める大事な一票――確かにそうだろうが、そこまで深く考えている国民は何パーセント居るのだろうか。十時から校長会の会議があったので、投票所の設置準備は他の職員にお願いした。明日はまた五時半起床だ。

正午から、松丘保養園の北柳吟社とおかじょうき川柳社の交換句会。予定より大分遅れたが到着。初めてお逢いする川柳人の人達だが、自己紹介が進むにつれ、「ねぶた」や草兵さんの話しに出てくる聴き馴れた柳号が次次出てくる。

草兵さんの前からの、ハ氏病は遺伝ではないなどのPRが効を奏してか特別奇異に感じなかった。私自身は割に神経質で、病院食しかり、病院の中の食堂でさえろくに食事が出来ないたちだし、他人の家に招待されても、ちょっとした事で食欲を無くしてしまう程だから（見かけによらず）、この日の句会には少々覚悟らしきものを抱いていたのだが――。

「私達は狭い世界で生活しているため川柳の句想もどうしても狭くなりがちで」そう、山野辺代表の挨拶の中にあった。しかし、なかなかどうして、作句も選もやはり川柳歴の重みを感じさせられた。

草兵さんの母堂きみさんから、この日の句会のために、メダル十個の寄贈があった外、三十四さん、草兵さんからの賞品も山のごと。おまけに故十佐一さんの筆による色紙三枚。

おかじょうきの句会では毎月一枚、この十佐一さんの色紙だけが唯一つの賞品なのだが、私の心掛けの故か、今だに手にしていないのだ。

楽しい句会だった。その楽しさは閉会後の懇親会にも続いた。北柳吟社の人達の持つ心の明るさがいつまでも残った。ぜひ来年も開きたいものである。

夜――淡路放生の句集をよむ。負けそう。十一時十分就寝。

七月五日（土）曇

Cの会。新岡二三夫さんの参加を得て久々に六人。少少マンネリか？、もう一度Cの会の在り方を考え直すいい機会かもしれない。

草兵さんからいい話しを聞いた。松丘保養園へ宮様が訪問された時のこと。奇骨さんが先日の交換句会でもらったメダルを胸に下げ、壁には十佐一句碑の色紙を飾り、宮様を迎えたという。宮様も思わず声をかけずにいられない程の貫録だったのではないだろうか。

交歓句会の折、北柳の人たちが柳号ではなく「じっちや、じっちゃ」と奇骨さんの事をいっていた事を思い出して、まだお逢いした事がない奇骨さんに、ほのぼのとした人間味を感じた。人間万歳！である。

永六輔さんが「身障者と、これから身障者になる人」のためのコンサートを全国で開いている。この言い回しには賛否両論があるようだ。が、永さんの言いたい事は「皆同じ人間だ」という事だろう。そう言う意味で言えば私はりっぱな身障者である。常人より絶対的に足が短いのだから。

青森省悟宅よりタクシーで蟹田まで直行。しがないサラリーマンの草兵さんにまた迷惑をかけてしまった。

小田原金一の「北辺の嵐」（津軽書房）を読み始めるおもしろそうだ。明日は町民運動会、七時半集合。中師ガンバレ。　〇時三十分就寝。

身辺雑記

田原　浩

寮舎が個室制度になり、入居して暮すようになってから十一年になる。三畳間にサンルームのついた見るからに息のつまりそうな部屋である。坪数を取らない事と、お金のかからない寮舎である事がよくわかる。

余裕などある筈もなく、小物を置くと、あとは寝る処があるだけがやっとである。五合桝に一升を入れている と表現した人がいた。部屋の中を見廻して見る。火の気もないのにすすけたように赤茶けた天井。押入れの戸。蛍光灯には蝿の糞が模様を描いている。月めくりの暦に五木ひろしが笑っている。月が変われば、ひきさかれ、まるめられて焼却炉に灰となるであろう。

ステレオがある。素晴らしい音を聞かせてくれる。まさに音の芸術だ。テレビがある。世界の情勢をまのあたりに見せてくれる。大型の冷蔵庫がある。食品を保存してくれる。夏にはかかせない扇風機、掃除をするにも、箒など使わない。物なべて取揃えてありながら、心のどこかにぽっかりと穴があいて、風が吹き抜けてゆくこの空虚さは何だろう。

ノックをする者がいる。答えると補導婦が二人入って来た。六日の冷奴とみそ汁ではどちらがよいかと云う。冷奴と答えると何やら記帳をしている気配だったが、やがて出て行った。

雨上りの花壇を見ていると埃りが洗い流されて緑が鮮やかだ。支え木に止まっていた雀が糞をすると飛び去った。小用にゆくべく廊下に出る。静かだ、十二室もあるというのに物音一つしない無人の館のようである。

気分転換に公園に来た。木の間を吹き抜ける風は今だ肌寒いが、落葉松の新緑が鮮かだ。唯一の憩いの場所だったのに今は人影もない。園内との境界線になっている土堤を乗り越えて外に出てみる。民家がそこにある。かっては憚かられた行動である。一日中公園を歩き廻っている盲人に出逢った道すがら四方山話しをする。個室に暮す気楽さなどを話す。だがこんな川柳もあるんだよと教えてくれた。「屁をひっておかしくもなり独り者」。

或る夜のテレビドラマで、こんな事を言っていた。独りでいると人間が人間でなくなると?、この言葉を聞いた時、なぜかどきっとした。

いまわしいこの病いを世の中にはびこらせたのは一体何者だろうか。人事をつくして天命を待つという言葉があるが、こう何も彼も、うばい取っては、人事をつくす術がないではないか。

廊下に出ると隣り合せに裏山がある。松と杉の古木がちょっとした林をかたち造っている。林の中は熊笹が群生している。昔、療養所が人里はなれた山の中にあったその面影を残しているのである。木のある処に鳥が集まる。今年は鶯が来てよく啼いた。誰もが気づいて鶯のことを口にした。

隣りの部屋に七十二才になる老人が住んでいる。ストレスを発散させているのであろうか、悲鳴に似たような声をはりあげて、何やらぶつぶつと言い出し始める。しばらくして、己れに気づき又、大声を出して自嘲するのである。通りかかりの人が、そっとのぞいていった。唯一の安住の地であるこの療園も、近年は著しく変貌した。同病相扶け合ったヒューマニズムは、遠くどこかえ消し飛んでいった。

閉ざされて暗かったこの療園も、こんなに明るくなった。人間の知恵の深さを思い知らされた。改めて辺りを眺め廻している今日此の頃である。

明鏡集（四月分）

鈴木可香選

山野辺昇月

療養の俺には要らぬ指定席　(佳)
今日もまた話題豊富な盲い達
老醜を写す鏡の憎らしい
オイル危機物価負けずにはね上り
ネクタイを緩めてからの酒の味
老いの愚痴まだ花冷えの日が続き
食って寝て医療施設で積む馬齢
カセットのガイドへ拝観料払い

高野明子

満開の花をいたわる花ぐもり
流行風邪軒並みあえぐ熱の床
補導員風邪を貰った声になり
人前のくしゃみ悼かる流行風邪
タンタンタン俎板の音母の音　(佳)
戸を繰れば太陽こんにちはと温い
足萎えの友代筆のペン握る

鎌田娘雀

ちっぽけな善意大きく感謝され
言うなれば怒鳴ってやりたいこの世相
難民を救う善意の海を越え　(佳)
生きている証拠に汗も流れ出る
風邪癒えて俎板の音はずむ朝
忠告を笑顔で受ける出来た人

原七星

役目とはいえ雨の日も家を出る　(佳)
不機嫌な妻へテレビを小さくする
混浴で聞く責任のない話し
退職の皮算用を聞いてくる
死んでから詫びる涙の不幸せ
もう会えぬ人かも知れぬ手を握り

茅部ゆきを

反省の刻を与える陽が沈む
明日という未知へ期待をかけて寝る
晩成に賭けた賽の目未だ出ず
奇形魚の目が人間を睨んでた
職場ある義肢のハンカチ真っ白い
ひたひらに生きてく手話の瞳がきれい　(佳)

木霊する凱歌に努力報いられ
終列車諫める母の頬が濡れ
春めけど遥か険の弔霊碑
またたける星影友の好きな詩
観桜の日取りまどわす此の寒さ

猪狩子面坊

お祭りのように春斗もり上がる
禁酒した父を家計簿笑ってた
春の雪積もる力もなく消える
曲るまで母の目にあるランドセル

遠藤芳富

(佳)

代筆と顔寄せ合って日と和み
右足は今日から義肢の世話になる
両の手で労わる様に義肢を撫で

太田千秋

白鳥が来て蘇える療の沼
白鳥が来たとパン屑持って出る
白鳥も馴れてパン屑手から食べ
流行風邪一人が引いて皆んな引き
車椅子花を臭かせる窓へ着け
種蒔きをベッドの父へ聞きにくる
風邪引きが増えて往診昼を過ぎ

(佳)

太田千秋

折り返す人生加速度に下り
八起き目の期待義足の足袋を替え
いいとこへ大工が五寸釘を打ち
昼と夜を違えて眠る痴呆症
心まで貧しくはなし妻も義肢

起きるにも寝るにも早い不自由舎
寝そびれた腕きへずれる枕掛け
美しく見えても佗し花吹雪
病床の疲れを癒やす四季の色
長生きは会えぬと思う人と会い

急がねば遅れる義肢の骨が鳴り
冠のつく正直の義肢動く
療園も広し通夜と齢祝い
朝の挨拶が一日気持よし

茅部ゆきを

川柳 むつみ集（五月分）

小山冷月選

手探りで鉢へ水やる夫の留守
言いすぎた言葉前後見失ない
うつかりと小石叩いた手が痺れ

高野明子

ふる里へ思いが走る木の芽和え
摘み草を夕餉に添えた日を偲び
生かされる愛の深さを噛みしめる
手探りの洗濯嬉し汗を拭き
生甲斐として夫見舞う探り杖
寝たきりの笑顔へ見舞い安堵する
野も山も空も心も五月晴
若い顔しても耳から老いてゆき

原七星

（実弟急死）
慟慌の胸をおさえて壁に佇つ
突風に当てにしていた綱が切れ
明日のこと知らず電話で笑い合い
水入らず幼い時の事に触れ
名産と聞き所望する舌つづみ
適齢期痩せる事にも気を遣い
躾いて自己過信した愚を悟り
とぼとぼと歩む他人と同じ道

山野辺昇月

松丘の初夏を彩どる藤つつじ
フォーク手に外国生活したと酒落
新茶の香心ゆたかな朝にする
娘から送られた新茶を友へ分け
足腰に老いの兆しが忍び寄り
酒もよしお茶も飲みなと娘の便り
世が変る中に変らぬ茶の香り

猪狩子面坊

陳情のきびしさ桜ひそと咲き
好きだった聖歌に友の笑顔浮く
慰める如く郭公も碑のほとり
友情を生む一本のシガレット

遠藤芳富

我慢にも限度があって立ち上り
再会の言葉少なくして別れ
アルバムに思い出深い過去があり
他人事と聞き捨てならぬ冷ややかさ
踏台の要らぬ昭和の子の背丈

俳句

欣求俳壇（六月分）

村上三良選

花めぐりして療園も広かりし
ぜんまいが届き俄かに忙しく
田山陽司

青葉風終日吹きて日暮れけり
志村満

歩こうの列や郭公しきり鳴く
平山幸運子

つつじ咲く散歩コースのかわりけり
家並みの途切れて続く花林檎
志村満

巣作りの番いの燕飛ぶ廊下
逢いに来し母と散歩や閑古鳥
アカシヤの花盛りなるバスの旅
平山幸運子

梅雨晴や句碑見学のバス発ちぬ
鶯や宮様迎ふ日も迫り

俳句

みちのく集（六月分）

佐藤静良選

そこらまでとはわらび採る篭提げて
四阿のベンチ堅しや花の冷え
田山陽司

六月定例句会

梅雨寒の袖なしを着重ねもして
平山幸運子

開け放つ部屋吹き抜ける風緑
仲野良男

筍が届き俄に忙しく
田山陽司

久々に吾子と電話やホトトギス
志村満

通信歌評（四月分）

成田小五郎選

新寮舎に移り二人の日々となりしづかなる夜妻さみしめり

小松健二

評、淡々とした詠みぶりであるが、しみじみとしたものを読者にあたへる。それは構へる所がなく気持を素直によんだのがよいのだと思ふ。二句「移り二人の」と句割れになつてゐるがそれが自然であつて三句以下をいかしてゐる。

雲南に作られし茶に親しみて喫む朝々をわれはすこやか

滝田十和男

評、この歌も心ひかれた歌だ。「われはすこやか」の結句など仲々こうはゆかない所だが、この場合嫌味なく清々しい感じをあたへる。「親しみて」はここで小休止をし四句、五句をいかしてゐる。

一本の大根が五百円するという薬のごとくオロシを食べる

矢島忠

評、このままでよく分る一首で「薬のごとく」も同感できる。ただ結句の「食べる」が少し気になるので「大根」を下句にまわし、例へば「一本が五百円もするといふ薬のごとく大根オロシを食ふ」などもあるかと思ふ。

嵐やみ夕静もれる寮間を下る雪解の水音きこゆ

小山桂村

評、一首春の詩情を漂はせてゐる。特に「下る雪解の水音きこゆ」が気持よい。「寮間を」は少しぎこちないので「寮の間を」または「寮の丘を」などどうか、また「夕静もれる」は「静もるゆふべ」もいいやうにおもふ。

雪の夜に出でゆきしより二十日経し帰らざる飼猫を妻はまた云ふ。

根岸章

評、この種の歌としては仲々いい歌で、余韻もある。事実をそのまま詠んでゐるやうで心ひくもののある

のは、猫への気持がゆきわたつているからであらう。「飼猫」でねことよませるのか。単に猫でいいやうに思ふ。

佐藤一祥

両の掌にあご押しのせて机の上に歌作るとき学童に似し

評、この歌は結句の「学童に似し」が焦点であるが、嫌味のない自画像になつている。「押しのせて」は「押しあてて」また「歌作るとき」は「歌つくるわれ」もいいやうにおもふ。

短歌

白樺短歌会

松永不二子

臥せる時以外は欠かさず仕へ来し教会の委員今日退かむとす
弱き身故自ら退きて悔なきになどこみ上げて心崩るる
吾に適ふぎりぎり迄を奉仕して偽りなきを救ひと思ふ
役退くに長年の労ねぎらはる今日の教会無性につらし
身に適ふ事を求めていそしまん抜け殻の如き生を怖るる
雪道に義足をかばふ左膝夕は痛く労はりてもむ
弱視吾をみちびきくれて青々とさはら垣根が雪より覗く

矢島忠

心臓の発作に独り臥し居れば窓辺に干したる大根菜が鳴る
発作時に服む頓服は筆太に袋に書きて箱に入れ置く
徴用の若き日習ひしハーモニカの教則本が色あせて出づ
ノブ廻す矢印ドアに確めて心電図伝栗持ちて入りゆく
また一人汚職の犠牲自殺者を出して大企業生きのびてゆく

佐藤一祥

新築の寮に入居の順番の制度疑はず荷造り初めつ
入居者の順番制を疑はず発表前に移る仕度す
転室を午後に控へて病む妻は食慾なきを嘆くのみなる
病む妻に肩かしてゆくその途中新舎入居の人ら賑はふ
亡き友の空室に妻と移されて新舎入居の人らを羨しむ
うつそみは果すことなき刈草を馬につけひく夢のさめたり
夕迫る茜の燃ゆる向つ丘の裸木の白樺赤く空指す
木の芽路にいま行交ひしこの友も顔日焼けして歯並は白し
鴨遊ぶ沼面を波紋の寄りきつつ岸にうつれる松を揺らしぬ
二大国の国防に関する論争をひとりラジオに夜更かし聴きぬ

田原浩

人の世の儀式に習ひ除夜の鐘をききつつ年越しソバを喰ふなり

熊本の見知らぬ人よりとどきたる年賀状をまた取り出だす
感覚の麻痺する足を按摩すると叩けば異常な痛みの走る
威嚇する韓国人の有り有りと外国人の劣等感見ゆ
一夜にて盲目となりし人のゐて作る陽気よ苦しかろうに
補導婦の廊下を掃きつつ正月のまた来たと云ひ身の終りを云ふ
氷花咲く硝子戸ごしに気づきたり夜明の早くなりし見きはむ
なまけ居て七十円を損したり手袋えの吾の湯呑を落せり
足音を忍ばすもなし巡回の補導員らの消灯しゆく
東方の港より船の始動音きこゆる春の息吹の様に

根岸　章

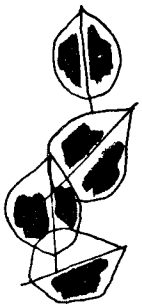
批判するのみに自治会の役員を引き受けくるる人らの少なし
療園に自治会あるを支へとせむ不自由者ら多し吾もその一人
三百余集いて開く総会の議事録記しつつ気のゆるみなし
議事録を記しつつゆく指萎えのペンの乱れて疲れかさなる
座布団を腋に挟みて弱きらは患者総会にみちびかれくる
療園に医師の不足を嘆け合ひ年の一度の総会終る
役になながくありて傲慢になる心戒めつつ事務所の机に対ふ

滝田　十和男

白鳥の沼に降りしと告げてきし声の弾みて朝の戸を開く
汚れたる水掻き分けて餌を欲る白鳥のなかの幼鳥幾羽
声高く啼きつつ空を巡り翔ぶ白鳥の群れの北へ発つらし
雪堀りて墓参の香を手向けゆく人見え春の彼岸か今日は
ひらひらと樹の間を移る鳥のいて薮蔭の雪解けず残れる
歌の友今朝はテレビにものは云ふ中学生の制服のこと
皮下脂肪薄くなりしと自らの腹を撫でつつ喫む雲南茶

加賀谷　幸蔵

療園と故郷の家庭を往き来する吾が人生は渡り鳥の如し
冠婚葬祭の簡素化成らず療園の新居祝いも奢るこの頃
ダイヤルを指に廻せぬ人もいて電話ボックスに鉛筆備ふ
青々と続く田圃に転作の稔りし小麦おちこちにみゆ
年々に米の消費は少なくて減反増へれど古米は減らず
眉あげて米価値上げを訴ふる代表等の顔怒りにもみゆ
二年もの据置米価と減反に農吾が憤懣やるかたのなし



随想

しゃぼん玉

花田二徳

ハマナスの歌

またゴモクソと綴り並べる。頭の体操ともなるか。

十年も前、保養園に来て先ず園内を廻ってみたら、楓公園の向う側の土手でハマナスを見付けた。オヤ、こんな所にハマナスが…と思った。ハマナスは海岸の砂地に自生している植物なのだから。

先日、「甲田の椹」の編集室での雑談中たまたまハマナスに及んだ。「保養園には妙な所にハマナスがあるヨ」と言ったら、「ああ、あのハマナスでしょ、あれは昔患者の脱走を防ぐ意味で土手を築き、バラ（棘）のあるハマナスを植えたんですヨ」と、菊地マサミ君が語ってくれた。

なるほど、バラ線（有刺鉄線）の鉄条網としてわざわざ植えたのか、そうでもなければあんな所にハマナスが生えているはずがないと、はじめて合点がいった。

そこで、まだあのハマナスがあそこに在るかと、昨日さらにたずねてみたら、だいぶ散りかけてはいたが五株ー六株がすぐそれと分かる紅い花をつけていたのにほッとした。

バラにはトゲがある。それでトゲのことをバラとも言う。イバラの道はトゲの多い道である。一茶の句には「古郷や　よるもさわるも　茨の花」とある。一茶にとっては古里は痛く冷たいものであったらしい。

ハマナスのバラ（トゲ）を利用して、あの土手にハマナスを植えたものと知って、あらためて土手の長さを眺めてみれば、土手は一連のアカシアの並木でもあるのに気付く。カラタチのトゲの垣根の代わりに、アカシアのトゲの垣根を造ったものと見える。

そして今は「部外者の出入を禁ずる」制札が立っているところをみると、今は逆に外部の人間の侵入を防ぐためのトゲの垣根と変わっているのである。土手のハマナスもアカシアも笑いが止まらないのではなかろうか。

啄木のハマナスの話しに移る。函館の大森浜に「潮かをる北の浜辺の　砂山のかのハマナスよ　今年も咲けるや」と、啄木の歌碑が建っている。八戸にも野辺地にも田名部にも、小樽にも、また釧路にも同じ歌のものが建っているかも知れない。青森県の花はリンゴで、青森市の花はハマナスだというのに、青函連絡船の旅愁をのせたものか、青森の合浦ケ浜の啄木碑は「船に酔ひてやさしくなれる　いもうとの眼見ゆ　津軽の海を思へば」と、

遠く沖合いからの潮風に吹かれている。

右の啄木の歌のハマナスは痛く冷たいトゲのハマナスではなく、椿姫のツバキにも劣らない紅く咲く花を意味するハマナスで、東北、北海道を遍歴して巡り合って忘れ得ないでいる若い女性のことであろうと、世の物好きどもはセンサクするのである。多感な啄木の情熱にふさわしいものにしたいのであろう。

ということで、八戸は八戸で、函館は函館で、釧路は釧路でという風に、このハマナスはオレの所のハマナスを歌ったものだと、それぞれ我田引水で、自分の所の女性にしたくて論争したがるようだ。植物そのものは東北、北海道、北陸、山陰各地の海岸の砂原に咲いているものなのだが。

故・松本満史画伯は「ワだば断然八戸の女だと思う」と、私に語って、モゾモゾとその根拠をつぶやいたことを思い出すが、今は内容をすっかり忘れてしまった。

函館の女性だとする主張の根拠は「砂山」にあるようだ。啄木は海のない渋民村で生まれ育った反面、「東海の小島の磯の白浜に……」とか、「砂山の砂に腹這い初恋の　いたみを遠くおもひ出づる日」とか、「いたく錆びしピストル出でぬ　砂山の　砂を指もて堀りてありしに」とかのように、砂や砂山を彼は大変好きであったようだ。

横道になるが、ひと頃、石原裕次郎がヘ砂山の砂を指で堀っていたら　真赤にさびたジャックナイフが出て来たヨ　どこのどいつが……」と、哀調テンメンと唄ったのは右の啄木の歌を盗用したパロデーであろう。

さて現在、前記の「潮かをる……」歌碑がある函館の大森浜は、昔は所々砂丘を形成していて、碑のあるあの辺を「砂山」と函館人は通称していた。地名のようにもひびいて聞こえた。

くどい話しになるが、こういうことがあった。曽って（昭和三十五年頃）、函館飛行場に降りてクルマで市内に向った。私は昭和九年の函館大火の前後二年ばかり函館に住んでいた経験があるので、だいたいの土地感はある。

クルマは昔と一変して観光道路化した大森海岸を走る。「砂山でちょっと停めてくれ」と運転手にたのんだら、「スナヤマ町？、スナヤマ？」と、半ば独り言のようにつぶやいてから、「あッわかりました。啄木でしょ、砂山でしょ」という次第。

クルマを降りて、立ってみると、最近建てたらしい「潮かをる……」の啄木碑の他に、あたり一面に立派な建物が並んでいて、砂山もハマナスも見えない。そぞろに「砂山の砂に腹這ひ初恋の……」啄木の「いたみを遠く思い出づる」ばかり。海風だけが昔のままで、啄木の碑をふき撫でていた。

そのように、函館人は啄木の歌の「砂山」は大森浜の砂山であり、ハマナスは函館の女性だと主張したいらしいのだ。無理もない。

私なら此の啄木の「砂山」は特定の地名、つまり役所の土地台帳に登記されている名称ではないと思う。たとえば「石江字平山」「大森字砂山」の場合のような「平山」や「砂山」ではなく、普通の海岸の砂原、砂浜、砂丘、砂山といった程度の砂山だろうと思うのである。だからどこの砂山でも、彼女でもいいではないかと思うのだが。

本当のところは啄木本人に聞いてみなければ判然としない難問である。その真相を確かめよう、「正しく理解しよう」と、腹黒い正義派が十萬億土の浄土の啄木へ無線電話をかけてみたところで、啄木は「どちらでもお前らのいいように解釈してくれヨ、石をもて追われる如く此処まで来た此の身に、今さらなんだヨ」と、憮然として皮肉の一つも言うぐらいのものであろう。

歌は、受け取る人それぞれの胸の中に、自由に広く深く伸びてゆくのが名作なんだそうだから、吾われはめいめいに、啄木の心を忍べばいいではないか。

北海道大学のコドモらの歌にもある。〽ハマナス紅き磯辺にも、スズラン香る谷間にも……」と、青春はどこまでも伸びる。もう語るを止めよう。

駈け込み寺もポックリ寺も

婬奔ノ婦ハ嬬シテ尼トナリ、熱中ノ人ハ激シテ道ニ入ル。（菜根談）とある。

凡夫から高僧に至るまで、程度の差こそあれ、人は、みなそんな気持になるものではなかろうか。瀬戸内晴美や今東光のことだとする必要はあるまい。

また、鎌倉の東慶寺のような「駈け込み寺」が舞台だと考える必要もあるまい。

ともあれ、大昔からそのような社会相が行なわれていたものであろう。近年はやや形式が変わって、蒸発とか脱サラとかハコブネとかいうのもはやるようになって来た。時代の流れというものであろう。一杯やると居ながらにして夢は桃源郷に遊ぶ男もある。

駈け込み寺の一歩前進か後退かは知らないが、奈良のイカルが町のポックリ寺（吉田寺）に行ってみたくなったという男から最近手紙をもらった。地獄であれ極楽であれ、そんなこと分別しているのも面倒臭く、火宅の煩悩からポックリと逃げ出したくなったらしい。ワカル。お寺とか宗教とか、そのためにあるものであろう。いわば衆生の「生活の知恵」というものか。かけ込み寺も、ポックリ寺も逃避のための施設か。最近は病院もそのように利用されている。タイホかとなれば逃け込む。私にも四つや五つの病名は付け得る。先ず今にも消えそうな不整脈だからイザとなれば入院だ。安心していつでも来いというわけだ。

妙な事ばかり。だから「仏念には無義をもて義とす。不可称、不可説、不可思議のゆへにと、おほせさふらひき。」

（歎異抄）

園日誌

○印自治会

六月中

1日　秋山久之司祭布教（聖ミカエル教会）他四回。

〃　○青森県選出参議院議員補欠選挙実施。（於松丘会館）

2日○全医労松丘支部に対して56年度予算要求のはがき陳情の協力要請をする。

3日○執行委員会開催、五月中の収支報告等の案件処理。

〃　○54年度整備による夫婦新棟各室入居者の抽選を行なう。

〃　○56年度予算要求行動中央交渉団へ激励電報打電。

〃　○厚生省医務局長、療養所課長へ要請電報打電。

4日　ヂル・ジューベー神父布教（カトリック教会）他七回。

〃　○特重寮入居者主催の慰安昼食会に執行部全員招待される。

〃　○夫婦新棟各室への入居者決まる。

〃　○厚生省医務局管理、整備の両課長宛に要請電を打つ。

5日　准看護学校生徒、萱野高原に野外炊飯。

〃　○東北地方医務局へ伊藤会長、井上委員陳情のため朝出発、帰園は夜。

〃　○56年度予算について、各政党本部、地元代議士、厚生省、行政管理庁等へ要請書発送。厚生省年金課長へ要請電を打つ。

6日　山形キリスト教独立学園高等学校生徒来園。

〃　○県立、市立の医療機関利用について、県庁と市役所へ伊藤会長ほか九名陳情に行く。

〃　○厚生省療養所課、結核成人病課へ要請電打つ。

〃　○陳情はがき投函本日で終わる。

7日○執行委員会開催、地区連絡係規定の一部改正案、その他を審議。

〃　○小沢元厚生大臣慰問に来園。園内放送で挨拶される。

9日○居住棟整備について独身不自由者と執行委員全員が懇談する。

10日　さつき展開催（松丘会館）

〃　コールドウエル宣教師映画伝導（首狩族ここに愛あり）

〃　○高松宮殿下御来園について、事務長、福祉室長が説明に来る。

〃　○釣交友会バスレク（裏月海岸）

11日○相愛会バスレク（ネブタの里）

12日○地区連絡係集会。

〃　○皇太子同妃殿下行啓記念植樹碑を病棟前に設置する。

〃　○盲人会バスレク（岩木山）

13日○執行委員会開催、ハンセン氏病を正しく理解する集い開催の件、他六件審議。

〃　○夫婦不自由者（12組）新棟へ移動（13日～15日まで）

14日○男亡（秋田県出身）72才。

〃　○緊急執行委員会開催、（故戸井田吉之助氏への供物贈呈について）

〃　○盲人会館の件で、盲人会役員と担当委員が懇談。

16日　物故者告別式（カトリック教会）

16日　天理教青森県分教会安野ふじ会長、津軽新城分教会蛯名直四郎会長来園（天理教）

18日○夫婦軽症者（21組）新棟へ移動（18日～22日まで）。

〃　○衆・参議院議員選挙、最高裁々判官国民審査の不在者投票を行なう。

19日　コールド・ウエル宣教師布教（聖生会）。

20日○執行委員会開催、規定一部改正に伴う地区連絡係の選挙実施案他を処理する。

22日　22日～28日、ハンセン氏病を正しく理解する週間。

〃　○衆、参議院議員選挙、最高裁々判官審査の投票（7時～18時まで）於松丘会館。

23日○将来構想研究委員会開催。

24日　秋田県結核予防協会婦人会19名来園。

〃　宮城県公衆衛生課並びにらい予防協会四名来園。

25日　貞明皇后をしのびハンセン氏病を正しく理解する集い（市民会館）入園者130名バス二台で参加。

〃　高松宮殿下同妃殿下ご来園、午後両殿下、特重寮、病棟入室者を親しく御慰問される。高松宮殿下より入園者に見舞金を頂く。同妃殿下より職員へ慰労金を頂く。

〃　○藤楓協会聖成理事長、北村青森県知事ほか随伴者多数。

〃　○寺松厚生省療養所課長、安西東北地方医務局長と会見。医療の充実、施設整備、職員増員等について要請する。執行委員全員出席。

〃　沖縄県らい予防協会総務課長外二名来園。

〃　群馬県予防課田村参事来園。

26日○正しく理解する週間行事の療養作品展を市内松木屋デパートで開く（七月一日まで）。

〃　広島県環境保健部公衆衛生課平田佐課長補佐、畑本典昭技師来園。

〃　長野県衛生部保健予防課高橋久孝主任来園。

〃　長生き体操指導のため指導員二名来園（市老人福祉課より）

〃　○大西多磨全生園々長、自治会事務所に来所。

27日　男亡（秋田県出身）79才。

〃　○執行委員会開催、作業運営細則六項の一部改正。その他の案件審議。

29日　物故者告別式（楓林寺）。

発行所　財団法人　松丘保養園慰安会
（郵便番号　〇三〇―〇二）
所在地　青森市大字石江字平山十九番地
（電話(0177)(88)〇一四五・〇一四六番）
（振替口座仙台七二六四番）
発行人　荒川巌
編集人　天地聖一
印刷所　青森市大字幸畑字松元六二の三
青森コロニー印刷
電話（代）(38)二〇二一番
定価二三〇円　〒六〇円